

神の手違いで死んだ試験管女子は
巡ヶ丘のJKに転生してチートな
能力と共にがっこうぐらしの世界
を救うそうです。

CROUS

私は聖奈萌 光。とある研究所の実験で生まれた所謂試験管ベビー。

一緒に作られた兄弟たちは失敗作と呼ばれ殺された。

工業大学を首席卒業した私は就活に明け暮れていた

神様の手違いで死んだ私はどうなるのか…？

工業系の大学を卒業した特撮、アニメ好きなりケジョが神様により転生しがっこうぐらしの世界でゼロワンの力を持ち暴れ回ります。

がっこうぐらしと仮面ライダーゼロワンのクロス作品です。

12／5 8：41 追記 UA100突破！ありがとうございます！

12／6 22：06 追記 UAが200超えました！ありがとうございます！

12／7 07：31 追記 UA300超えました。伸びが早くて嬉しいです！ありがとうございます！

12／07 23：11 追記 UA400突破！ありがとうございます！！！！

2020／4／4 1：33 追記 UA1000突破してました、ありがとうございます

ます！

目次

はじまり

悲しみのかけらと日常の始まり

めぐねえと呪いの記憶

オリキャラ紹介(現時点)

はじまり

どうも、ふと書きたくなったので亀更新ですが宜しくお願いします

工業系の大学を卒業した特撮、アニメ好きなりケジョが神様により転生しがっこうぐらしの世界でゼロワンの力を持ち暴れ回ります。

主人公はロングの黒髪、目は金で身長は一般的な女性、って感じですよ。いつかイラスト出しますね。

「また落とされた…」

と届いた郵便物を見て意気消沈しているのは私、
NO.01 実験体こと聖奈萌 光
(みなも ひかり)だ。

実験は完了したからと有名工業大学の電子工学科を首席卒業した私は研究所を割と多額の報奨金とともに追い出された。用済みって事かな？

「あーもう…何処もダメじゃん…詰んだ…」

お金はあったので衣食住は足りているし趣味である特撮やアニメ、機械いじりも出来ている。

だがそろそろ仕事しないと、と就職先を探す事3ヶ月。

何処も彼処も素性がひた隠しにされている私を気味悪がって採用してくれない。ベツトで状況を整理していた私は外から聞こえる正午の鐘により現実に戻された。

「はあ…昼ごはん作るの面倒くさいし、コンビニ行こ…」

今日何度目かもわからないため息を吐きながら、財布を持ち家を出た。

閑散としているこの市街地は所謂ベツトタウン。日中はとても人が少ない。

「うわ、寒い…」

コンビニに辿り着き適当にサラダや冷凍食品、日用品も少し購入しさっさと店を出る。

9月中旬のこの外の暑さはやはり受け入れ難い。だが店内の効き過ぎる冷房もいかななものか。

「あっつ…」

ボケーっとしながら帰路を辿り、帰る途中。

ドクン！と心臓が激しく痛み始めた。

「うっ…う…ああ…!!」

痛い、痛い、痛い、痛い。

痛みに耐えられなくなった私は買い物袋を落としてその場に倒れ込んだ。

それに気づいた通行人が「大丈夫ですか!？」と声をかけてくるが、私の意識には届かない。

痛い…痛い…痛い…

遠のいていく意識。

救急車のサイレンが響く。私の脳裏には、処分される時の皆の顔が浮かんでいた。皆、こんなに怖かったんだ…私なんかがこんな歳まで生きちゃって、ごめん…そんな事を考えながら私は、死んだ。

「……」

「おい、生きてる？あ、もう死んでるか。おい？」

「んう……うわっ、眩し……!？」

意識を取り戻すと何でもない一般的な和室に居た。

照明が眩しくすぐに起き上がる。そこには二十代だか三十代の男性がいた。

「やっと目を覚ましてくれたね。今回は本当にごめん。ま、取り敢えずそこは入りなよ」

「は、はあ……」

「どんな状況か理解出来てない、って感じだね？」

「……まあ、さっき死んだって言われましたけどね……」

「あはは、確かに」

何があははなのか。この方は少しずれた感性をお持ちのようだ。

「でさ、実は死んじゃったの俺の手違いなんだよね。」

「……はい？」

「いやさ、俺は実は君の住んでた現世を管理する…其方の言葉だと神ってやつなんだ。」

「???」

「でさ、人間が増え過ぎると他の生物が絶滅するわけさ。だから適度にこっちからの干渉で寿命が近い人を悲しいけど減らさないといけないの。で今回も一人くらい減らさなきゃ、って儀式したの。間違えてこうなった。」

「神様辞められたらいかがですか…?」

「ごもつとも…」

しょんぼりする神様に溜息を吐きながら、ふと疑問に思った事を聞く。

「まあ神様だって事は別に疑っても意味のない事なんで特に何も言いません。じゃあ、何で私がここに居るんですか?」

「あー、その事ね。儀式を終えてから気づいた俺は招魂、まあ君をこの俺の部屋に呼び寄せたんだよね。」

「神様の部屋って和室なんですかね?」

「うん、この炬燵？　っていうのは凄く気に入ってる。天界は寒いからさ。」

「…駄目みたいですネ」

「ちよ…ってまあ、それはよくて。神のルールの中に、誤った儀式による犠牲者は願いを二個叶えた上で、希望する世界希望する形で生前の姿のまま転生させるって言う羨ましい権利があるんだよね。その上世界の運命を良い方向に持っていくと死後神になら」それを先に言ってください！? めちゃくちゃいいじゃないですか！? 何それ最高！」

「お、落ち着いて…さ、願いを聞こうか。二つまで、何でも叶えてあげる。あでも無限増殖するやつは駄目だよ?」

説明を聞いて私は考え込む。最高の条件だが転生する世界と願いをよく考えなければこの条件は生かしきれない。

「んー。君は生前いじめ? 受けてたみたいだしいじめられなくなりたい、とかさ」私の嫌な記憶を思い出させてくる事に少しイラッと来たが、考えはまとまった。

「あの、本来存在しない物を持ち込む事は可能です?」

「存在しない物…? 存在しないものなんて無いよ。人間がそう考えてるだけ。虚

構は存在しないんだ。ま、普通の死に方する人間はそう考えた方が幸せだけど。で？」

「仮面ライダーゼロワン、っていうのがあるんですけど。その仮面ライダー達が使う物を何か小さいものに自由に使えるように収めて貰えますか？」

「お、能力系二個じゃないんだ。楽で助かるよ♪」

「後は今から説明する物を作ってもらって一緒にそれに収めてください。」

「おー、本当にそれで良いんだ…」

「それがあれば世界をも救える自信があります。」

ほー、と感心した様に神様は頷いた。

「良いよ。じゃ、その物を作ろうか。」

く5時間後く

「できたー！」

「結構時間かかったねー。でも希望通りになって良かったね！」

「はい、ありがとうございます！」

作ったのは私が生前妄想で考えた物だ。名前を「ライズバスターソード」という。

ゼロワンに登場するプログライズキーを四つまで装填し、それに合わせた銃撃、斬撃が打てる。

この銃剣には解析機能、プログライズキー作成補助機能がある。

その上ブランクのキーを装填し物質を解析するとそれに合わせた属性キー、「エレメントキー」が作れる。

…まあ、所謂な〇う系主人公が持ちそうな剣である。

「じゃ、転生する世界を選んで。」

「がっこうぐらし！って言うアニメの世界でお願いします。設定は巡ヶ丘に転校してきた高校生で。過去は…生前のままでいいです。」

「過去は変えないんだ。意外だね！うんうん…よし、準備完了！で、これ！」

差し出されたのはゼロワンに出てくる「ライズフォン」だった。カッコいい…！「この中にさっき言ってたのが入ってて、自由に出し入れできる様になってるよ。」

「ありがとうございますっ！神様！」

「あはは、こちらこそありがとう。短い時間だったけど楽しかったよ！じゃ…」

神様が祈る様なポーズを取る。

この世界の支配者ライトの元に命ず。不幸なるこの人の子に祝福を、そして望みの世界へ転生させたまえ。神秘なる未来の加護があらんことを。

私の足元に魔法陣が浮かび、光出す。

「じゃ、頑張つて！次は神同士として会おうねえ！」

「はい！さようなら、面白い神様！」

ちよつと気分を上げながら、私の体は光に消えた。

巡ヶ丘学院高校 屋上

「…もさん？聖奈萌さん？」

「ひゃっ!？」

目覚めると、私は巡ヶ丘学院高校の屋上で夕暮れ時の景色を見ていた。

佐倉慈先生ことめぐねえに呼ばれて目が覚めた様だ。

「もう、そんなに驚かなくて良いじゃないですか…」

「どうしたのもーちゃん、体調悪い？部活動見学もこれで終わりだし、電車動き

出したら一緒に帰ろうね！」

「園芸部の紹介は大体終わりよ。良かったら、ここで休んでく？」

「あ、ああ…大丈夫！」

丈檜由紀ことゆきと若狭悠里ことりーさんに心配されてしまったが、何とか受け流す。

電車が動き出したら…？え、まさかこの日スタートなん…あのさあ…

「…？めぐねえ、どうしたの？」

スマホを見て心配そうにするめぐねえはちょっと待ってね、と言って電話をかける。

「どうして母さんでないんだろう…」

どうやら実家に電話をかけている様だ。

その隙に今の自分の服を確認してみたが、制服に黒タイツ…ちょっと気恥ずかしい。

すると、直ぐに神山先生から電話が来た。

「もしもし？」

『佐倉さん!? 今どこにいるの!?』

そうすると扉から叩く音が聞こえる。

「何だろ？」

「他の当番の子かしら…？」

『屋上？なら鍵を締めて！絶対誰も入れないで！職員室は…!!』

通話音は二メートルほど離れていても聞こえる。

ガシャーン、という音と共にめぐねえが絶望や困惑が混じった顔になり、スマホを下ろす。

「はい、今開けるよー！」

その事は聞こえてないかの様に由紀はドアを開けに行く。

「待って！」

「ん？めぐねえ？でも、開けてあげないと…」

『誰か…！お願い、開けて！』

「っ！」

めぐねえが扉を開ける。そこには恵比寿沢胡桃ことくるみが、陸上部の先輩を運

んできていた。

「恵比寿沢さん!？」

「早く…鍵掛けて!」

先輩の方は怪我をしている様だ。

「この人、怪我してる…!」

「何があったの!？」

「先生、早く保健室へ!」

「下は駄目だっ!もう、駄目なんだ…」

「なに、あれ」

あー…やっぱりこうなる。

由紀は校庭の方を見ていた。

そこにはまさに死屍累々、人が人を喰らい、叫び声と共に「彼ら」が増えていた。

「急に、皆が…ああいう感じになって、すぐに陸上部も巻き込まれて…それで、先

輩が…」

「うう…」

「っ!?先輩っ!」

「外に出て、救急車を呼ばないと…!」

「駄目、さっきからかけてるのに繋がらない…」

「え…わかんない、なんで…どうして、こんなこと」

ドカーン、という轟音と共に住宅地の各所から黒煙が上がる。

それとほぼ同時に彼らが屋上の鉄扉を無理矢理開けて入ってきた。

ファッ!?そこは原典通りじゃないんすか!?

「皆、下がって!」

私は咄嗟に叫んだ。

「駄目、聖奈萌さんも逃げて!」

「大丈夫です!私がなんとかします!」

先輩を抱えてめぐねえ以外は下がってくれた。

本当にこんな状況でも生徒を守る事考えられるめぐねえは神。はっきりわかん
ね

このままだと詰みなのでポケットに入っていたライズフォンからバスターソー

ドとゼロワンドライバーを呼び出し、ライジングホッパープログライズキーを構える。

「聖奈萌さん、それは…?」

「お前らを止められるのはただ一人…私だけだ!」

\$\$\$jump\$\$\$

起動し、オーソライザーにかざす。

\$\$\$authorise\$\$\$

待機音とともに機械のバツタが召喚される。意外と大人しい。

「変身」

\$\$\$PROGRAMRISE\$\$\$飛び上がライズ! RisingHopper\$\$\$

『A jump to the sky turn to a rider kick.』

「もーちゃん…?」

適当にジラフ、タイガーのキーをホルダーに入れ、攻撃開始。

袈裟斬り、上段斬り、切り上げ…と言った具合にどんどん切り裂いていくが、終わりが見えない。

「はあ…一気に吹き飛ばすよ！」

バスターの鍰部分を展開しジラフ、タイガーをセットし閉じる。

\$TWOPROGRISKEYREADYFORSLASH.\$

「おらあああ！」

気合の掛け声とともに大振りに袈裟斬りを放つ。

\$TWICEKEYBREAK.\$

特撮の様にドカン、とはいかないがここにいる全ての彼らが切り裂かれ、絶命した。

私は変身を解除し、ブランクのキーを4本呼び出しバスターにセット。

血が噴き出る死体に剣を向けると、スキャンが開始される。

\$FOURELEMENTKEYCREATED.\$

できたのは水素、硫黄、鉄に酸素のキーだった。

下がっていた皆は呆然と見つめている…訳ではなかった

由紀は「あ…ああ…」と発狂寸前。くるみは彼らとなった先輩に襲われている。

それ以外の二人はパニック状態。

とにかく、くるみを助けなければ。

「大丈夫!？」

「アアアア…」

「グッ…!？」

彼女の方に駆け寄ったが、彼らのあり得ない力により殴られて吹き飛ばされてしまった。

生身だと受け切れず、コンクリの壁に叩きつけられた。どうやら肩にヒビが入ったようだ。

「聖奈萌さんっ!？恵比寿沢さん逃げて!!」

めぐねえが叫ぶ。

くるみが声にならない声を出しながら後退りする。

そこには一本のシャベルが。

「う、あああ!!」

ザクツ。

小さな音だが、大きく聞こえた。

首に刺さり、先輩は倒れた。それにくるみが何度も、何度も突き刺す。

だが何回目だろうか、由紀が彼女に泣きながら抱きつき、それを止めた。

彼女はシャベルを落とし、その場にへたり込む様に座った。

「う、ううう…あ、あああ…」

「バカだな…何でお前が泣くんだよ…」

彼女の目元にも、涙が流れていた。

嗚咽を押し殺し我慢している様だ。

「…変な帽子。」

泣き続ける二人を横で、更に入ってこようと扉を叩き壊そうとする彼らを防ぐためにめぐねえとりーさんは鉄扉を押さえていた。

「先生、このままじゃ私達…学校も、外も…これからどうしたら…」

「…」

「先生…先生っ！」

りーさんの声が木霊する夕日は、これから起きる運命を憂えている様に見えた。

はい、ここまでです。

次回から本格スタートです！

悲しみのかけらと日常の始まり

どうも、CROUSです。

UAの伸びが早くてびっくりです。なんだこれは…たまげたなあ
そんなことを言えるのも読んで下さっているみなさんのおかげです！ありがとうございます。

というわけで第二話、スタート！

やっと彼らが諦め何処かに行った後各自自己紹介をし私達は暫く休んでいた。

「っ…くるみ、大丈夫？」

肩に鈍痛が走る。叫び出すほどでは無いけど、どんどん痛くなっていく。
くるみの方に行こうとするとりーさんが駆け寄ってきた。

「大丈夫かしら？怪我してない？」

「だ、大丈夫だよこのくらい…折れては無いし…っ！」

立とうとすると更に強い痛みが走る。

「もう、全然大丈夫じゃないじゃない！」

「私の事はいいいから、自分の心配をしてな。ごめん、私のせいで…」

「うう…もーちゃん、大丈夫…？」

「ごめん、ありがとう…」

「聖奈萌さん、大丈夫ですか？そういうえば、さっきのは…？」

皆心配してくれている様だ。

めぐねえがさっきのゼロワンについて説明を求めてきた。隠しても特は無いいし、

素直に言うとしようかな。

「ああ…ライダーシステム、って言います。さっきのは仮面ライダーゼロワン。他にもあるんですけど。私の命の恩人がくれたんです。」

「凄かったな…。まるで戦士だったよ。」

「ライダーシステム、ですか…なるほど。守ってくれてありがとう」

「あはは…なんか照れるな」

くるみが言う。正直照れ臭いけど、嬉しかった。

「佐倉先生、これからどうしますか？」

「ええ…取り敢えず、ここにいても埒が開かないし、校舎に入らなきゃ行けないのだけど…」

「あいつらが居るから難しいよな…」

「唯一闘える聖奈萌さんは怪我しているし、どうしたものかしら…」

うーん、と唸る佐倉先生。

するとくるみがシャベルを持って立ち上がった。

「…私、行ってくる!!」

「恵比寿沢さん!？」

「待って!」

鉄扉を開き飛び出して行ってしまった。

あちゃー…アニメだとここなかったからどうすればいいかわかんないな…取り敢えず行こうかな

「くるみ、待って！えーっと、皆さんここで待っててくださいね。後で来ます！」
 負傷して無い方の腕にバスターを持ち、私はくるみをおいかけた。

「聖奈萌さん！もう、何で…」

〈校内 三階〉

窓は割れ、血が飛び散っている。まずは掃除からかな。

水素と酸素のエレメントキーを差し込む。

$\frac{\$}{\$}\text{Hydrogen}\cdot\text{Oxygen}\cdot\text{C-Reaction}\cdot\frac{\$}{\$}$

$\frac{\$}{\$}\text{Water power, charged}\cdot\frac{\$}{\$}$

$\frac{\$}{\$}\text{Gun rise Water Jet}\cdot\frac{\$}{\$}$

バスターはエレメントキーを組み合わせてることにより攻撃以外の機能も出せる。

今は水素と酸素で水を作り、作られた水による高圧洗浄モードだ。

「よいしょ、と…」

飛び散っている血を洗浄しつつ進んでいると、少し遠くにくるみの姿が見えた。
 私の瞳は研究所の研究の一つである「人工眼球」である。視力を大体20位まで
 なら上げられる。けど、長く高視力を使っていると目が疲れるので大体7でいつも

は固定している。

キーを取り出し仕舞い、彼女のいる方に向かう。

「おーい！くるみ！大丈夫ー？」

「お、聖奈萌！肩は大丈夫か？」

「うん、動けないわけじゃ無いから。にしても…居ないね」

「ああ…さっきの光景が嘘みたいだ。」

三階、二階を探したが、彼らは殆ど居なかったという。

これなら他の皆を連れてきても大丈夫そうだ。

「よし、じゃ皆を連れて来るから聖奈萌はここで待ってろ。」

「うん、いつてらっしゃい…で、いつまで隠れてるの？」

「ふん、気付いていたか」

お約束な展開で登場したのはメカメカしい異形、「マギア」である。

ゼツメライザーに入っているのはドードー。かなり強力なマギアだ。

「さて、これ以上被害を拡大したく無ければあの女どもを超越せ。」

「随分正直だね…そんな事、すると思う？」

「大口を叩くのは結構だが、貴様は今鎖骨が損傷している。そんな状態で私に勝てるとしても？ 変身もままならない筈だ。それに貴様はミュータントとも呼ぶべき存在。致命的な欠陥があるだろう…スキャン完了、どうやら筋力が平均の半分ほどしか無いな。」

「女の子の体を勝手にスキャンするとかデリカシーのかけらも無いね…倒せなくても、撃退すればいいじゃない？」

そう。私は人工的に作られた人間…否、人間に限りなく近いミュータント。様々な実験のおかげで至る所で平均以上の能力が発揮出来るが、筋力だけは平均以下だった。

「ふん…まあいい、貴様の命だけ貰っていくとしよう！」

「っ！」

殴りかかって来るのをバスターで受け止める。負傷した肩が痛むが、今はそれどころではない。皆を守る為こいつを早々に片付けなければ。

キリキリキリキリ、と骨が嫌な音を立てる。鏑迫り合いに持ち込むも、そう長くは保たなそうだ。

「力が弱い、相手にならん…どうするつもりだ？」

「力で勝てないなら技で勝つよ！」

エイムズショットライザーを取り出し相手のベルトに発砲する。

脆弱な部分を攻撃された相手はよろめき、隙ができた。

「それでも喰らいな！」

\$\$\$storong\$\$\$

アメイジングヘラクレスキーを起動しセットしようとした、その刹那。

パンという乾いた音と共に銃が連射され、私の腹部を弾丸が貫いた。

銃を持つ戦闘服の人間がマガリアに指示を出すと、二人は撤退して行った。

マガリアは私に向かって言った。

「貴様の命、確かに貰い受けたぞ。実験体No.01。」

「…!!…何で…その名前…」

姿が見えなくなり、気が抜けた瞬間血を流し倒れてしまった。

「おーい、聖奈萌！大きな音がしたけど、大丈夫だったか…っ!？」

血を流し倒れる私を見て皆が駆け寄って来る。

「光ちゃん!? どうしたの、光ちゃん!」

「聖奈萌さん、どうして…!?」

「もーちゃん…? 嘘…」

「佐倉先生、職員室から救急箱を! 私は止血をします!」

「わかったわ!」

ああ、りーさんは流石の統率力だ…私、助かるよね

そんな事を願いながら、私は意識を失った。

（一ヶ月後）

「う、ううう…」

目が覚めると、そこは少し広い布団の上だった。横にある窓から照らす太陽が眩しい。

目を細めて空を見ていると、視界にりーさんの顔が入って来た。

「あら、やっと起きた? 体、痛くない?」

「あ…う、ん」

暫く体がうごいていなかったのか、体を起こすとちょっと痛かった。

そんな私を再び寝かしつけると

「もう、まだ起き上がっちゃだめ。一ヶ月位経ってるのよ？あの日から。」

「一ヶ月…!？」

「ええ、怪我也酷かったししょうがないわよ。でも、目を覚ましてくれて安心したわ。」

「うん、ありがとう…そしてごめんね、迷惑かけちゃって。」

「大丈夫よ、由紀ちゃんは何か様子がおかしいみたいだけど、それ以外は平和だったわ。」

「そっか…」

その後めぐねえとくるみ、由紀が来た。由紀からは抱き付かれ、正直すごく痛かった。

由紀がりーさんに怒られる中、残りの二人に私が目覚めるまでの話を聞いた。

購買部に行き物資を確保した事、二階を制圧しバリケードを張った事など、ずいぶん精力的に活動していたようだ。

安心したのは、めぐねえの身に何も起こらなかった事。

残念だったのは、由紀の幼児退行が始まってしまった事。

それによりやはり学校の幻影を見ているらしい。暫くは合わせてあげてね、と言われた。

「あ、授業の時間！めぐねえ、行こ！もーちゃんもお大事にねー！」

「ええ、そうね。聖奈萌さん、お大事に。」

由紀が元気な声で呼びかける。いってらっしゃい、と返し送り出した。

「じゃ、ちょっとご飯の準備するからちょっと待っててね。」

「私は見回り行ってくるな。お大事に！」

二人とも居なくなった所で体を起こし傷を確認すると、少しまだ痛むが殆ど治っていた。肩も治っていたし、ミュータントの回復力は化け物だな、と思う。実際化け物のようなものだけだ。

「あ、これは…」

「あの日、教室に残ってあった荷物は持って来たわよ。それはそうと、起き上がってどっか痛まない？大丈夫？」

「うん…ちょっと傷跡が痛むかな…ご飯、ありがとね。」

「いいえ。物資も少ないから簡素なものだけど、我慢して頂戴…にしても、回復力が凄いわね。びっくりしちゃった。」

「あ…それについては事情があつて…」

「治るのが早い事に越した事はないわよ。でも、何であんな怪我をしていたかそれが気になるわね。」

りーさんがいつもの笑顔ではなく、真剣な顔で質問してくる。

あ…と目を逸らす。でも、ここで隠しておく意味は無い…由紀がいるなら兎も角、りーさんなので大丈夫だろう。

展開的に早すぎるというツツコミはなしだ。

「わかった…話すね。でも、正直何で殺されかけたのかはわかんないんだよね。でも、今から話す事に何かしら繋がりががあると思う。」

目を閉じて昔のことを思い出す。

「私は異世界の人間…いや、ミュータントなの。人間に限りなく近い何か。私が持つてるライダーシステムもこの世界に来る時に貰ったもの。」

「ミュータント…異世界…まあこんな状況で嘘はつかないわね。うん、それで？」

「国立の裏の研究所で研究の一環で私は作られた。私の本当の名前は実験体No. 01。一緒に作られた子達もいたんだけど、皆が7歳になる時に私以外は“失敗作”って言われて殺された。」

「…!?なんで…」

「やっぱり国も管理が面倒臭かったんじゃないかな…遣る瀬無いけど、私にはどうもできなかった…」

処分される時の皆の顔が浮かんでしまうが何とか振り払う。1秒でも長く考えていると狂ってしまいそうだ。

「私はそれからも人体実験とか、戦闘訓練とか…色々あったけど、大学を卒業したんだ。それで就活が滞ってた時に死んじゃって、今はこの世界にいるの。」

「そんな事が…」

「うん。ミュータントだから回復力も強いけど、私は筋力が凄く弱いて欠点もある…なんで襲われたかはわかんないけど、多分その研究所がなんかしら絡んでるんだろうね。」

「…でも、その研究所は光ちゃんの世界のよね？こっちに來れるのかしら？」

「人間を一から作るなんていう神様の領域に踏み込む研究も成功させちゃうんだし不可能では無い、だろうね」

「…」

彼女は俯いている。どうやら暗い雰囲気になってしまった。

「そっか…嫌な事、思い出させちゃったわね。ごめんなさい。」

「ううん、大丈夫。ねえりーさん。ご飯食べたら購買と食堂に行かない？物資調達しなきゃ。」

「光ちゃんが大丈夫なら良いわよ。」

「うん、じゃ頂きます。」

「食事後」

「ご馳走さまでした！」

「お粗末さまです。じゃ、洗って來るわね。ちょっと待ってて。」

「うん！ありがとう」

そう言っただけで彼女はキッチンに行った。

「そういえばプログライズキーってどれくらい種類があるんだろ？」

ふと疑問に思い、ライズフォンを確認する。

基本的なライジングホッパーから名前を知らないキーまである。知らないものはどっかのヤベーイみたいなのの可能性もあるのでNGだ。

解析ができれば良いのだがパソコンが無いので手詰まり。

ベルトはゼロワンドライバー、ショットライザー、フォースライザー、サイクロンライザー……何だろうこれ？よくわからないベルトもある。

武器は見覚えのあるやつは勿論例の如くよくわからないものもあった。

そういえば制服は新しくなっている。タイツは無いので、購買部にあれば良いな……と考えているとりーさんとくるみが戻って来た。

「おう！元氣そうでよかったよ。購買と食堂行くんだって？私も行くよ。」

「という事で、行きましようか。」

「うん！」

（一階）

何匹か彼らが居るのが確認できていて、今は階段の影に隠れている。

「とりあえず私が斬り込むよ、ついて来て。」

「気をつけてね。」

「了解！」

ライズフォンからアタッシュカリバーとヘラクレスを取り出す。

アタッシュカリバーを変形させ、キーをセット。

\$\$\$BLADE RISE!\$\$\$

\$\$\$P r o g r i s e k e y c o n f i r m e d R e a d y t o u t i l i z

e. H e r c u l e s B e e t l e s a b i l i t y. \$\$\$

\$\$\$a m a z i n g g カバンダイナミック! \$\$\$

「はあっ!!」

斬撃を放ち、彼らを一気に葬る。

必殺の威力で腕が痛い、走り抜ける。

そのまま廊下を走り抜けると、購買に辿りついた。

「ふう…なんとか着いたね。さ、回収しよ。」

「ええ、色々あると思うし彼らも居ないみたいだからできるだけ回収しよう。」

「んー…この購買は品揃えがいいなあ」

欲しかった細かい衣料品は勿論、風船やトランプ、ビタミン剤やカップ麺もある。…どちらかというとコンビニエンスストアな感じだ。流石にあんな大量のソーラーパネルを設置するだけある。

だがやっぱり避雷針の隣にソーラーパネルはガバガバすぎると思う。今度直さなきゃな…

（数分後）

色々回収した結果持って来た私のバッグがパンパンになった。まだ物資はあるよ
うなのでまた来たい。

「さ、じゃ食堂に行きましょうか。」

「そうだな、でも生物はこの前殆ど回収しちまったぞ？炊飯器も殆ど壊れてたし…」
「んー、そういうの好きだし直そうか？技術室は二階にあったし。」

「あら本当？有難いわね。じゃあ回収するのはお米や回収してない食料。あと炊飯器。」

「了解！」

購買を出ると時刻は13:00。お昼時だからか、彼らが集まって来ていた。

皆が身構えるが、ここは筋力の無い私は荷物運びはできないので掃討をする事にした。

先に行って、というとりーさんが止めるが大丈夫、すぐに終わるからというた
 洩々二人は向かって行った。

「気をつけて！無理しないでね！」

「御意！」

ゼロワンドライバーとシューティングウルフを取り出す。この変身、実験してみ
 たかったのだ。

\$\$Bullet.authorise.\$?

「変身！」

\$\$progrise撃ちまくまくりステイ！ Shooting Wolf.\$?
 『The elevation increases as the bullet is f
 ired.』

\$\$アタッシェショットガン！ \$?

アタツシショットガンを構え、数十体いる彼らに乱射する。

粗方絶命させると、起き上がって来る個体がいた。

何で、と思いい腰を見るとゼツメライザーが巻かれていた。

「あゝあゝあゝ…」

\$\$\$NEOH…\$\$\$

ネオヒマギア。この前のドードーと違い、そんなに強くないマギアである。

とつとと終わらせよう。くるみたちが帰って来ちゃうかもしれないし。

\$\$\$storongauthorise\$\$\$

\$\$\$progrise荒い！ 強い！ 硬い！ amazingHercule

s!\$\$\$

『With mighty horn like pincers that flip the opponent helps.』

「おー…りゃっー！」

頭部の角、ハーキュリーホーンでマギアを掴み、大窓から外に出る。

ウルフをドライバーに6回スキャンし、パワーをチャージする。

i g a r i s e t e r a r i s e \$? \$

\$ b i t r i s e b y t e r i s e k i l o r i s e m e g a r i s e g

ライズスロットのキーを押し込み、パワーを解放する。

amazing transformation

角で拘束しながら一気に飛翔し、地面に向かって超高速で下降する。

「アアアアアア!!」

地面に叩きつけられると、ドカーンと爆煙を上げマギアは破壊された。

破損したネオヒゼツメライズキーと一緒に手紙が落ちて来た。

「…？何だろこれ。ま、いつか。戻ろ…」

ゼツメライズキーと手紙を回収し、校内に戻る。

安全のために校内に戻ってから返信を解除する。時刻は14:30だった。

そろそろ由紀も戻って来る頃だろうか。生徒会室こと学園生活部の部室に戻ると

りーさんは家計簿を、くるみはシャベルを磨いていた。

「お、おかえり！大丈夫だったか？」

「あら、お帰りなさい。彼らではない相手だったみたいだけど。」

「うん。あいつらはマジア。ロボットの一種。このゼツメライズキーを使って変身するの。」

「へえ……って、壊れてるじゃねーか。」

「まあそこは難しい話になるからまた今度ね？」

キーを仕舞い椅子に座る。

疲れた足が疲労から回復していく。お風呂に入りたいなー。と思った。

あ、そうそう。とくるみが炊飯器を運んでくる。

「これ、直せるか？これがあれば結構便利なんだけど。」

「ん、任せて！ちょっと工具取って来るね。」

そう言って技術室に向かう。

技術室は南京錠が掛かっていたので、申し訳ないけど破壊した。

部屋に入ると流石と言ったところか、日本製の良い工具が沢山あった。

はんだごてやはんだ、ドライバーや使えそうな電子部品を粗方持つ。静電気防止のゴム手袋と、一応作業用ゴーグル。

必要なものを粗方持ち部屋に戻り、分解を始める。見た感じ感熱部の接触不良。

本来構造上ほぼ有り得ないことだが、部品が壊れてないだけマシだろう。

感熱部を直し、部品を戻していると由紀が帰ってきた。

「たっだいまー!」

「お帰り!」

「お帰りなさい、由紀ちゃん。」

「おー、由紀お帰り…うん、ここにこれはめて…」

それぞれが返事をする。こういう日常も悪くない。

「あ、もーちゃん何か難しそうなことしてるね?」

「由紀には出来ないな?これは」

「にゃ、にゃにおー!」

「ふふ、でも覚えればできるよ。今回は部品も壊れてなかったし簡単だったかな…よし、修理完了。通電テストしようか。由紀、コンセント挿して。」

コンセントを渡すと部屋の端にあるタップに挿してくれた。内釜にりーさんがお米を入れ、炊飯ボタンを押す。

すると問題なく動き出した。あとは待つだけ。

「よし、取り敢えず動いたね。炊けるまで待とうか。」

「うん！ごっはんごっはん♪」

由紀が待ち切れないといった感じで歌い出す。

そんな由紀をながら見ているとパラ、パラ、と雨が降り出して来た。

「おー、雨か：屋上にある洗濯物下げなきゃな。行ってくる！」

「うん、気をつけてね。」

一緒に生活するというこの空間には私が感じた事のない大きな優しさがある様に感じた。

そんな事を思いながら洗濯物を下げにいくというくるみを見送る私の頭の中には言い表せない嫌な予感がしていた。

手紙は次回になります。

原作を読んでもる方は雨で察したかと思いますが、次回はめぐねえが：

ネタバレは禁止です笑

あ、聖奈萌さんの絵は力量と時間の都合で用意できませんでした。
カスタムキャストというアプリで作成したので載せておきます。



めぐねえと呪いの記憶

結構このシリーズ書くのが止まらない。どうもクラウドです。

早速ですが第3話どうぞ！今回は短いです！

ピピピ、という音とともに炊飯器がご飯が炊けたことを伝える。

その音に由紀がすごい速さで反応した。

「炊けたー！」

「あはは、由紀はよっぽど楽しみだったんだね？」

「勿論だよ！美味しく炊けてるかなー？」

開けてみると暖かなお米の匂いと共に白いふっくらご飯が姿を表した。

よし、ちゃんと動いてるみたい。安心した。

「おお、ちゃんと炊けてる！」

「美味しそうね。」

「うん、ちゃんと炊けてよかったよ。」

くるみとりーさんも安心したようだった。

ふう、と一息つくためぐねえが入ってきた。

「あら、美味しそうね。この炊飯器は？」

「もーちゃんが直してくれたの！ 凄いいねえー」

「へえ、凄いね！ 私文系だからこういうのはどうにも…」

「私の趣味ってだけです。さ、夕御飯にしましょう！」

夕御飯はカツ丼だった。ちょっとへビーだったが、最近のアクティブさを考える
とこれでも足りないだろう。

…くるみの「私達はまだ若いから」という発言にはめぐねえがダメージを受けていたが。

夕御飯中、雨であることを思い出しさりげなく「あの日」への対策を打つ。

「ねえ、さっきから嫌な予感がするんだ…今日の夜、私バリケードの見張りしてもいいかな？」

「えー、体は大丈夫なの？」

「そうだぞ、まだ病み上がりなんだから、休んでないと…」

「でもこのままだとなんか取り返し of つかない事が起こると思うの：お願い！」
由紀とくるみが止めてくる。だからどうしても引き下がれない。

最後の方を真剣に言う to、めぐねえがんー、と言い条件を提示して来た。

「どうしても、って言うなら私同伴なら良いわよ。無茶はしないでね。」

「うーん、ちょっと不安は残るけど、先生が一緒に居るなら大丈夫なんじゃないかしら？」

「しゃーねーな、めぐねえ、気をつけてやってな。」

皆も了承してくれたようなので一安心。今夜は気張って行かない to。

〜 24:00 バリケード前〜

めぐねえと私は階段に座り雑談していた。

「それにしても機械を直しちゃうなんてすごいわね。どこで覚えたの？」

「んー、趣味ですかね。」

「： やっぱり腑に落ちないの： 聖奈萌さん、転校してくる時の書類見たのだけ

ど……」

「……なるほど……めぐねえに隠し事は出来ないですね。本当はしばらく話さないつもりだったんですけど……」

その後、朝にりーさんに話した事と同じ事を話した。

するとめぐねえはなるほど……と変に納得したように頷いていた。この世界の彼女は、思ったよりポンコツでは無いようだ。

「聖奈萌さん、1人で色々出来るのも凄いけど、今は貴方は高校生なの。私は先生だし、皆は友達でいてくれる。たまには頼ってくれたら嬉しいな。」

「ええ、ありがとうございます……」

「はあ……まさか聖奈萌さんが私と実年齢が近いとは思わなかったな。なんか親近感湧いちゃうわね。でも高校生に若返るなんて、羨ましい……」

「あはは、まさか私も高校生をもう一度なんて思いませんでしたよ。1度目は色々ありましたし、今も普通じゃないですけど……うん、この生活、好きです。」

話が止まり、手紙のことを思い出す。彼女にちょっと待っててくださいと伝え離れ手紙を見てみると

『命を狩り取れなかったのは惜しかったな。ゼツメライズキーはくれてやる。精々強化の糧にしろ。この前のような目に会いたくなければな。』

と記されていた。

なんだろうこれと考えると、死角からエネルギー弾が飛んできた。

伏せて避ける。弾は窓のサッシを破壊した。

「誰?!」

「あ、あああ…」

「ウォアアア!!--!」

\$\$\$BEROTH\$\$\$

\$\$\$GERU\$\$\$

\$\$\$ゼツメライズ\$\$\$

彼女が突然の事態にパニックになっている。

「何あれ…?!」

「あれはマジア。私が使っているライダーシステムに似たシステムを悪用する事により出来る怪物です。めぐねえ、とりあえず安全なところへ!」

「ええ、気をつけて！」

彼女が隠れたところで、私も変身する。

\$\$THUNDER! authorise\$\$

「変身！」

\$\$springrise! ラララ! 雷鳴! 雷電! 電撃! Right i

ngHonet! \$\$

『Piercingneedle with incredible force』

「はあっ!!」

電撃を放ち相手の動きを止めると、胸部装甲のミサイルを放つ。

吹き飛ばされ怯むベローサをみてもうガエルが攻撃して来るが壁に追い込み足で

押さえつけ、必殺技発動。

\$\$ライトニングパクト! \$\$

足から出た超エネルギーの針により貫かれたガエルは爆散した。

やっと怯みから回復したベローサはエネルギー刃を発射して来る。

それを飛行能力を発動し回避すると、久しぶりにバスターソードを取り出す。

ウルフ、スコピオン、ホッパー、マンモスを取り出すと全てセットする。

\$\$\$Bullet! Stinging! Jump! Press! Four
y Ready for slash.\$;\$

「はあああ!!!」

\$\$\$Fourth key Break!! \$;\$

4つのプログライズキーによる超高エネルギーの斬撃を喰らい、ベローサは爆散した。

変身解除し、2つのゼツメライズキーを回収しようとするときまた手紙が落ちていた。

今度はすぐに見よう、と広げると。

『貴様らの教師の身を預かった。取り戻したくば巡々丘のショッピングモールに來い。』

「っ?!陽動?!めぐねえ!!!」

咄嗟に叫ぶが時すでに遅し。そこに彼女は、居なかった。

「∴行かなきゃ!!」

\$\$wing! authorise\$\$

\$\$progrise! Fly to the sky! Flying Falcon
n! \$\$\$\$

『Spread your wings and prepare for a force
e』

フライングファルコンに変身し、割れた窓から飛び出た。

雨の降る空を飛翔する。

ショッピングモールはどこだ。標高300m程から見下ろすと、市街地に大きな建物が見えた。

すぐにその方向に急降下する。着地すると、そこには暴走するGIGAの姿があった。

その下にはめぐねえがトリロバイトマギアによって拘束されていた。

すると私の脳に何かが語り掛けてきた。

『これは貴様に与える試練…共に生まれて来た命を見殺しにした貴様に命は助けられるか?』

「っ…」

「聖奈萌さん！ダメ、逃げてっ!! 私の事は気にしないで!」

「嫌!! 助ける…絶対に!!」

フライングファルコンキーを抜き、新しいキーを取り出す。

\$\$\$Press! authorise\$\$\$

何処からともなく、ゼアから分離したブレイキングマンモスジェットモードが現れる。

\$\$\$progrise! Giant walking! Breaking Mammoth! \$\$\$

『Larger than life to crush like a machine』
私は超大型形態、仮面ライダーゼロワンブレイキングマンモスになり

鎌を構える。GIGAに先手で背後から斬撃を叩き込むと攻撃対象を建物からこちらに変え相手も鎌を構え襲って来た。

「もう二度と私のせいで殺される人を出しちゃいけない…!! めぐねえは私がこの手で助ける!!」

その時私の心の中の何かに火がついた。

私の脳裏に焼き付く研究所の子供達の顔。それが鮮明になる度、私の心の火が大きくなる。

ガン、ガァン！と斬結ぶ。私は鎌をクロスさせ相手の鎌を受け、一気に上に上昇した。

相手はバランスを崩して倒れる。そこに馬乗りになり、鎌を放り出し殴る、殴る、殴る。私はどんどん暴走していく。

遂に中枢が破壊された相手は機能を停止する。

だが私の感情は止まらない。

「これで…終わりだああッ!!」

私は機能停止した骸をプレイキンググインパクトで破壊した。

ライジングホッパーに変身しなおしめぐねえを拘束するマギアを跡形もなく破壊し、拘束の縄を解く。私は電池が切れたように倒れ込み、変身が解除された。

「聖奈萌さんっ！」

「ごめん…めぐねえ、肩…かして」

「もう、めぐねえじゃなくて佐倉先生でしょ……無茶しないでって、約束したじゃない……」

そう言う彼女の頬には一筋の涙が流れていた。

「ごめん、なさい……さ、佐倉先生。風邪ひいちゃいますよ。早く帰りましょう？」

「……ええ。でも、どうやって帰りましょう？」

「これ使いますか。」

ドライバーにライズフォンを読み込ませる。

『Changing to super bike motorcycle mode.』

『頭上に注意してください』

「……へっ？って、きゃあ?!」

警告と共に、大きなライズフォンが降ってきた。

ライズフォンのバイクアイコンを押す。

『バイクアプリを起動します。』

\$\$\$モーターライズ！ ライズホッパー！ \$\$\$

バイクに変形し、エンジンがかかる。

「さ、乗ってください。」

「…便利ね、それ…あと、運転大丈夫？」

「車の講習しか受けた事ないですけど、多分大丈夫でしょう♪」

そう言い何か言われる前にスピードを出し学校に向かった。

→ 5:32 校舎2階 →

学校にギリギリ夜明け前に到着し学園生活部の部室に戻ろうとするとそこには大量の彼らがいた。

こいつらが本来はめぐねえを殺すであろう運命だったという事か。

「っ…?!」

「全く、こっちは戦って疲れてるんだけど…通じる相手じゃないか。めぐねえ、下がってて！」

絶句するめぐねえを隠れさせ、バスターを構える。

ざっと数は25、数秒あれば片付く。

私はベアーとコングを取り出しセットした。

ssBlizzard! Power! two progrise key Re
ady for slash.\$.\$

ssTWICE key Break! \$.\$

最初に冷気で一気に凍りつかせ、そこから重厚になった刃で一気に砕く。
彼らは死体も残さず綺麗に砕け散った。

「よし、完了っと…」

「お疲れ様。護ってくれてありがとう、聖奈萌さん。」

「いいえ…こちらこそ、ご心配かけて申し訳ございませんでした。」

「もう、そんな固くならないですよ…でも、もう絶対あんな無茶はしないこと!」

「ええ、分かりました」

苦笑いする私に微笑むめぐねえの顔は生徒を想う先生の顔だった。

それが少しイメージと違い、自然と吹き出してしまった。

「も、もう！何よ…」

「いえ…すみません、めぐねえもやっぱり先生なんだなって。めぐねえ…いや、

佐倉先生は生徒想いですね。」

「へっ?! え、えっと…ありがとう…」

そう言って照れるめぐねえは可愛かった。

めぐねえは皆を起こしに行くと言いついてしまった。

さつきまで暴走していたせいか体が若干重い。

GIGAと一緒に破壊したと思っていたその記憶が後に私を狂わせるなんて、その時は考えもしなかった。

どうでしたか? あ、めぐねえは死にませんよ! でもこの先重要な役割があったりします。

次回更新はちょっと期間が空きます。すみません

オリキャラ紹介(現時点)

現時点でのオリキャラ(ライト、光)の紹介コーナーです。
更新遅れてすみませんでした…

ライト

名前:ライト

性別:男(変えられるけど滅多にしない)

職業:神

全てを司る神。

普段は天界に用意した日本家屋に炬燵でまったりとしている。

天然である。

地上界の生物には慈悲深く、天界の規則は自分がそれを変えられる身でありながらもきちんと守る。

その世界のルールを守らない物には徹底して厳しい。

聖奈萌光

名前：聖奈萌光（みなも ひかり）

性別：女

職業：無職（転生前）、高校生（転生後）

日本の遺伝子研究所で創られた人工ヒューマノイド型生物。

同じ過程で創られた兄弟達とは違い、欠陥が少なく兄弟達とは1人を除き仲が悪かった。

身体には多用途のコンピュータが埋め込まれており、目には計測・計算といった機能等、各所に機械を利用した器官がある。無論ウイルスや細菌もコンピュータによる免疫操作で防御される。

その代わり筋力が平均より弱く、コンピュータが暴走していると免疫も格段に落ちる。

お化けや人魂等、目に見えないアストラル系統のものが極端に苦手。

特撮・アニメが好きである。

研究所には勿論悪感情もあるが、施設を借りて研究等をさせて貰ったり、自身を大切にしてくれた職員もおり悪いことばかりでもないようである。

兄弟達が処分された後は普通に学校に行っていたが、友達もあまり出来ず勉強に打ち込み、最終的に有名大学の電子工学科を卒業した。

文系は普通より少し上くらいだが、理系は電子工学だけでなくほぼなんでも出来る。

実験所からは報奨という名目で多額のお金を貰い就職活動をしていたが実ることではなく、ライトのミスにより死亡してしまう。

〈インタビュー〉

記者: CROUS

ライト

Q・全てを司るとの事ですが、具体的にどういう事でしようか？

「それよりもこれって尺稼ぎじゃないの？君ハーメルンの投稿は1000文字

からだって忘れてたよね？」

キャラ自らメタ発言しないでください。

「ま、いっか。んーまあ全ては全てだよ。全知全能、って訳じゃないけど。人間の想像が追いつく範囲なら全部思い通りだけだね。」

Q・光さんを間違えて殺してしまったとの事ですが、本当の所は？

「それ君が作者なんだから君が 1 番知ってるんじゃないのー？」
だからメタ発言しないで下さいってば。

「はい、まあ間違えたってのは半分本当だよ。あと半分は …… ねえ？ 君たち人間の世界の創作物の神様もやりそうな事かな？」

Q・最後に有り難き読者様達に一言。

「こんな変な作者の妄想作品を見てくれてありがとね！ どうやらがっこうぐらしの世界を救ってからの事も考えてるみたいだから良かったら読んであげてねえー！」

光

Q・ヒューマノイド型生物との事ですが、具体的にはどういふものなのでしょう
か？

「なんか聞き方が今のマスコミみたいなの……」

やめてください作者は一般高校生なんですよ！権力者に敵視されるような発言
は控えてください。

「はいはい。んー具体的について言ってもねえ。人工的に造られた精子、卵子を技
術で人間にしたって感じ。」

Q・ご自身の身体にコンピュータや機械が埋め込まれているようですが、実際ど
うですか？

「質問がアバウトすぎる……もうちょい良い質問ないの？」

書いてるの深夜なんです許してください……

「はあ……まあ便利っちゃ便利だけど、使いすぎると疲れるし自然治癒加速機能
とかは事前にONにしておかないと機能しないしで不便なところはあるかな。あと
計算問題とか自動でやられてつまんないから切ったりとかめんどくさい。」

Q・最後に有り難き読者様達に一言。

「はい。こんな文章力の欠けらも無い作品を読んでくださりありがとうございます。比較的ハードな展開が多くなりがちにはなりますが、これからも読んでいただけると思います！」

ありがとうございます。

どうでしたか？

最近がっこうぐらしのアンソロジーを読んだのですが、壊のみーくんがキャラ崩壊するパートは笑いました。

もう少しで本編更新するのでお待ち下さい!!

神の手違いで死んだ試験管女子は巡ヶ丘のJKに転生してチートな能力と共にがっこうぐらしの世界を救うそうです。

著者 CROUS

発行日 2022 年 10 月 8 日